Pink Ribbon Festival in Tsukuba 2007

つくばピンクリボンフェスティバル07

2007年5月13日(日) 母の日

つくば国際会議場エポカル

報告書

主催　NPO法人つくばピンクリボンの会
Tsukuba Pink Ribbon Coalition

理事長　植野映/筑波大学附属病院臨床医学系乳腺甲状腺内分泌外科
名誉大会長　市原健一/つくば市長
大会実行委員長　森島勇/筑波メディカルセンター病院乳腺科

共催　茨城県、つくば市、茨城県医師会、つくば市医師会、(社)茨城県放射線技師会、茨城乳腺疾患研究会、筑波大学附属病院、(財)筑波メディカルセンター、(財)茨城県メディカルセンター、東京医科大学霞ヶ浦病院、(財)茨城県総合健診協会、取手市医師会取手北相馬保健医療センター医師会病院日立メディカルセンター、土浦協同病院、NPO法人乳房健康研究会

後援　茨城県看護協会、首都圏新都市鉄道株式会社(TX)、NHK水戸放送局、茨城県ウオーキング協会

July 2007

写真　斉藤　さだむ

表紙　田中　佐代子

写真・画像・記事等の無断転載、無断使用をお断りいたします。

NPO 法人つくばピンクリボンの会

総論

森島　勇　筑波メディカルセンター病院乳腺科

つくばピンクリボンフェスティバル07は、2007年5月13日（日）天候にも恵まれた中、802名の参加者を得て無事終了いたしました。

ご報告に先立ちまして、本会の主旨にご賛同いただき、開催にご協力くださいました多くの一般ボランティアの方々、共催・協賛をいただいた団体・企業に厚く御礼申し上げます。

第３回目のフェスティバルとなる今回は、メインテーマを「乳がんをかんがえよう」としました。会場はつくば国際会議場を中心に、13 日午前中は乳がん検診・乳がん相談コーナー・ウォーク・ハート型のピンクの風船を用いたバルーンパフォーマンス、午後は２つの会場に別れ、メインホールでは「講演―乳がんをかんがえようー」で４つの講演とディスカッション、サブホールでは、放射線技師セミナー、患者のための講演会と家族のためのディスカッションを開催いたしました。

前日の12日には、自転車隊「銀輪隊」による約30kmのツーリングが行われ、ピンクリボン運動をPRしました。また、子供たちに“家族”や“お母さんを乳がんから守ろう”との題で絵を描いてもらったピンクリボン絵画展、乳がん検診向上に貢献した自治体に贈る「ピンクリボン賞」(東海村・桜川市が受賞しました)等、新しい企画も加わり、更に充実したものとなりました。

今年は例年になく検診の申込者が多かった点、一般の方からのボランティア提供や民間団体および地域の企業からの協賛等の支援の申し出も多々あった点から、この運動が少しずつ市民に浸透していることを実感いたしました。また、市原健一つくば市長を名誉大会長に迎え、行政と一体となっての運動に発展できたことは、大きな前進であったと考えております。

年間40000人を超える方が新しく乳がんになり、年間10000人を超える方がなくなっており、その数は増え続けているのが現状です。がん対策推進基本計画でも５年以内に乳癌検診受診率を50%以上に引き上げるという数値目標が閣議決定されました。引き続き市民の乳がん対する意識を高め、当運動の主旨である乳がん検診受診の啓発、乳がんを初期で発見する事、防げる悲劇を無くす事に力を入れて行こうと決意を新たにしております。

今後とも引き続き、本活動へのご理解ご協力ご指導をよろしくお願いいたします。

以下に、開催の詳細をご報告いたします。（つくばピンクリボンフェスティバル07実行委員長）

ピンクリボンに願いを込めて

島田　菜穂子　東京ミッドタウンクリニック放射線科（乳腺科）
NPO法人乳房健康研究会　副理事長

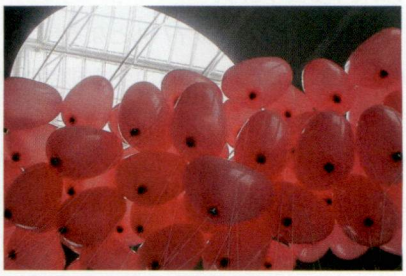
ピンクリボンにはせる私の思いは、夜空の星を思うより深いかもしれない。

私が乳がん啓発活動に対しての強い思いを持つようになったのは、米国留学がきっかけである。1992年、東京逓信病院で私が乳腺外来を開設した当時は、乳腺外来も、さらにはそれを放射線科医が行うことも国内ではあまり例がなく、すべてが手探りのスタートであった。

幸い診療科を超えて同僚・上司の協力と理解に恵まれ、また受診者にもお互いに参加しあう診療というスタンスを理解していただき、年を経るごとに本業の画像診断の業務よりかなりの時間を割くほどになっていた。そんなとき、かねてからの夢であった米国への留学のチャンスをつかみ、乳がん先進国の診療を経験したい、新しい画像診断の何かをつかみたい一心で胸を膨らましながら渡米した。渡米後、ブレストセンターで１か月も過ごすと、私は予想外の事態に気付き始めた。日米の大きな違いに愕然とした。この違いは医療のレベルでもなく、画像診断の新しさでもなく、ほかでもない一般女性たちの乳がんに対する関心と知識の高さであった。しかし米国女性が日本人女性

に比べ、教育レベルが高いわけでもなく、勤勉なわけでもない。私が拠点を置いたセントルイスはむしろ中西部ののんびりした街で、いまだにお尻の大きさが日本人女性の2−3倍はあるような体系の女性が多い、どちらかというとヘルシー志向が薄い古典的なアメリカの街だった。なのに、センターに来る女性は、乳がんがどれだけ自分たちに身近な病気であり、でもその珍しくない厄介な病気は、早く発見さえすれば命も乳房もとられることなく治すことができること、早く発見するにはマンモグラフィという検査を毎年することが非常に大事だということをみな知っていたのである。ショックである。

忘れもしない、東京で、いかにも知的で上質な暮らしをされているであろうと見える素敵なご婦人が私の外来に見えた時である。慎み深く着衣をはずすと、目に飛び込んだのは青黒くはれ上がり今にもはちきれそうなできものを抱え込んだ彼女の乳房であった。もう少し早く病院へ来てくれればなんとかできるものを。幾度となくこんな思いをしたことか。世界の経済をも動かそうという大都市東京のど真ん中の病院で、である。検診を毎年丁寧に受けていて発見された極小の乳がんに出会えることは東京の外来では決して頻繁ではなかった。しかしアメリカの田舎町では違った。マンモグラフィでしか発見できないような早期がんで治療を受けにくる女性がたくさんいた。日本人女性は決して怠けものでも無知でもない。なのに、このアンフェアは一体何なんだと叫びたい気持だった。米国の病院内をくまなく見渡しても何の答えも見つからない、そのヒントは病院の外にあったのである。町中の建物や看板、ジュースのパックにも、シャンプーのボトルにもピンクリボンが付いていた。テレビやラジオではメッセージが流れていた。”Mammogram saves your life”誰もが知らず知らずにいつでもどこでも乳がんに関する情報を得られる工夫がされていたのである。私が病院にいて、いくら頑張って目の前にいる患者さまと真剣に向き合っても、それだけでは日本は何も変わらない。日本人の女性に知ってもらいたいことが山ほどある。病院で来てくれる人をただ待っているだけでは、大切な情報は伝わらない。こんな溢れる思いを胸に秘めて、ピンクリボン活動のための団体を組織しようと奔走を始めたのは日本に帰国した直後だった。そして、帰国翌年、ちょうど2000年日本のマンモグラフィ元年、同志が集まり乳房健康研究会を発足してピンクリボン活動を始動した。ピンクリボンって何？という話から始めなければいけなかった当時は、何もかもが容易ではなかったが、あの時の、小さな一歩一歩が今や全国に広がり、そしてつくばにも根付き、たくさんの皆さんの願いと思いで素晴らしい活動となり花開いている。感謝の気持ちで一杯である。乳がんで亡くなる人がゼロになる日まで、花は何度も種をつけて、新しい芽を出して、また花が咲き続けるよう、続けなければならない。

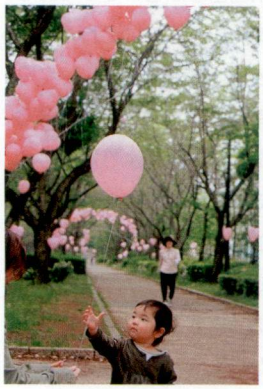


ピンクリボンに願いを込めて。

検診

鯨岡　結賀　筑波記念病院放射線科

昨年と同様に一階の会議室で受け付けを行い、南駐車場に茨城県総合健診協会、日立メディカルセンター、取手医師会病院の検診バスを設置して乳癌検診が行われました。各健診センターのスタッフと、さらに、つくば総合健診センター、東京医大阿見病院、茨城県メディカルセンター、筑波記念病院のスタッフに自己触診の指導、マンモグラフィについての説明、誘導などのお手伝いをいただき、総勢77名の方の検診を無事に行うことができました。今回は応募者が多く初めて受診者をしぼり、昨年受診なさった方にご遠慮いただくという形で受診者を決定しました。最終的には1昨年に受診なさった方がおおよそ1/4，初回受診の方が3/4という割合でした。30代の受診者が30名と最も多く、その中からは是非マンモグラフィも受けてみたいという声が当日にも聞かれました。マンモグラフィによる被曝や、若年の高濃度の乳房における超音波の有用性などの説明をおりまぜた検査方法に関してのもう少し詳しい事前の案内が必要かと思いました。検診の結果はカテゴリー3で要精査となった方が7名（9%）カテゴリー2（良性病変）が20名、カテゴリー1（異常なし）が50名でした。それぞれの受診者へは、検診結果とともに結果票の見かたというプリント（乳腺の嚢胞や線維腺腫



といった良性病変に関しての簡単な説明とカテゴリーに関しての説明を含む)、とマンモグラフィ検査を受けた方へはフィルムをお送りしました。

今回の受診を機会に今後も持続して検診を受診してくださる方が増えていくことを期待しております。お手伝いいただきましたスタッフの皆様ありがとうございました。(実行委員・検診担当)

ウォーク　植野　映　筑波大学臨床医学系乳腺甲状腺内分泌外科

“なんでピンクリボンにウォークなの?”の疑問から答えなければならないでしょう。食事は体に栄養を付けるもの、それゆえに主食は栄養効果を考えて選ばれる。ピンクリボンフェスティバルでは講演会にあたるでしょう。それに対してワインはその日の食事を楽しくさせ、われわれに高揚感をもたらす。ウォークはワインと同じ、我々に高揚感、さらには連帯感をもたらし、この運動の輪を広げる。

参加者の皆様に満足できるようにと日本ウォーキング協会茨城県支部の川上清氏とともにコースを選定した。純粋にウォークを楽しみたい方のためにはじめに長いコースを設定した。これはセンターから赤塚公園までペデストリアンを歩き、引き返して国際会議場に到達する約10Kmの本格派コース。途中、洞峰公園に立ち寄るつくば市でもっとも美しい散策道である。”2時間半も歩くの“という方のために短いコースもセッティングした。これは、センターから長いコースと同様にペデストリアンを利用して松見公園に向かい、折り返してシティを巡りピンクリボンをアピールする約4Kmのコース。

ホームベースは前日の銀輪隊のテントを利用した。このテントは大学の行事用のためのテントで白地に大学名が入った薄汚いもので申し訳なかったが、机と椅子は立派なものを調達できた。集合場所は駅前交番の裏手のセントラルパーク南西端とした。受付けは主に茨城県メディカルセンターとつくば総合健診センターのスタッフが担当し、筑波大学学生が補佐した。1週間前に水戸市にて会合を持ち、この日のために春日氏と入念に打ち合わせを行なった。

当日は、8時に集合し、受付けの設営を行った。ピンクの風船も届けられ、これは見事に新緑にマッチしてアピール度は満点。注目されたのか続々と一般の参加者が増え、200名となった。

川上氏の指導のもとで準備運動がなされ、9時半に長いコースが南方へと出発。その後、短いコースの参加者が集まり、再度、川上氏の指導のもと北方へと向かった。それぞれの参加者は風船を持参し、風船を配りながら、ピンクリボン運動(乳癌検診)の啓発を行なった。シティ内では子供たちにもみくちゃにされながら風船を配布。なんとなく若干いいことをしているような雰囲気になりながら、ウォークを終えた。

最後に、筑波大医学生の働きでテントが収納され、手際よく片付けが完了した。(実行委員・ウォーク担当)

乳がん相談コーナー　河野　いづみ

昨年のピンクリボンフェスティバルで好評であった「乳がん相談コーナー」を今年も行った。パンフレットやインターネットを介した広報を通じて相談コーナーの希望者を募ったところ、7名の相談を受け付け、希望者の相談内容を前もって整理、相談医の先生方の得意分野を考慮しつつ、相談者を担当の坂東先生に割り振っていただいた。相談内容は、術後間もない方の治療法について、術後の定期検診について、再発予防、再発後の治療について、など様々であった。

部屋には優しい音楽やお花、風船の飾り付けなどを行い、また、相談者のプライバシー確保のためのパーティション設置、ご夫婦やお友達など複数人で相談できるように工夫した。

相談時間はゆったりと40分程度を予定し、また相談医の先生方には白衣ではなく、通常の服装で対応していただいた。当日の申し込み6名を加え、今年は合計13名の方が相談を受けた。時間にゆとりがあったため普段の診察とは違い、ゆっくりと話しをすることができてよかった、などの感想をいただき、今回も好評だった。

一般にピンクリボン活動では早期発見と検診の普及が大きな目標であるが、実際に乳がんになられた方の不安や悩みを医師に相談できる場として、このつくばピンクリボンの活動の特徴として続けていければ、と願う。

最後に県内のみならず、東京、千葉よりご協力いただいた乳がん治療専門の諸先生方に心よりお礼申し上げます。（実行委員・相談コーナー担当）

銀輪隊　松永　かずはる

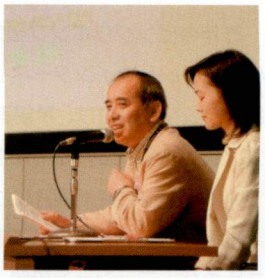
つくば学園都市で開催されるピンクリボンフェスティバルを地元の人にもっと知ってもらおうという主旨で、フェスティバルの前日、お揃いのピンクハートのTシャツ、自転車にはフェスティバルののぼりをつけてつくば市内を走り廻りました。
はじめての試みということでコース選定から隊列編成まで実際に走ってみるまで不安でしたが、参加のみなさんのご協力で快晴のなか事故もなく走り切れて大変よかったと思います。走っている時沿道から、「あれ何？」とか「頑張って」など声援ももらいました。いつか銀輪隊をみて、今日はピンクリボンフェスティバルの日なんだと言ってもらえる日がくるといいですね。（銀輪隊担当）

バルーンパフォーマンス　林　剛人丸　筑波大学芸術学群

今回このフェスティバルのバルーンパフォーマンスを担当して感じたことは、準備の段階で、メンバーのみなさんが情熱的に積極的に企画をつくり運営していることが伝わってきて、当日よりもミーティングのインパクトのほうが印象深いほどです。

風船を使った仕掛けはうまくいってほっとしました。世界的な活動であるピンクリボンにおいて、とりわけユニークであるつくばの活動が実り多きものであることを願っています。そのために僕が提供したコンテンツがささやかでも貢献できていれば幸いに思います。（バルーンパフォーマンス担当）

講演　乳がんをかんがえよう　植木　浜一　水戸医療センター



今回のフェスティバルのテーマ「乳がんをかんがえよう」のもと、エポカル中ホール300にて４つの講演を行なった。総合司会は昨年に引き続き松岡正美さん（NHK）が担当した。

（1）乳がんを考える　ー検診の重要性についてー
東京ミッドタウンクリニック乳腺科の島田菜穂子先生より講演があった。マンモグラフィ検診と超音波検診についてわかりやすいスライドで基本的な内容の説明があり、乳がん検診を受診することの重要性を強調された内容であった。

（2）乳がんと向き合う　ー自分らしく生きるー

患者さんの立場から曽我千春さん（VOL-NEXT 代表）よりご自分の経験にもとづく感慨深い内容の講演があった。乳がんと診断されてから、患者として、担当医の診療態度から不安に思ったことや元気づけられたことなど、診療側には耳が痛いが、大変参考になるお話であった。また、乳がんの治療を受けられて、不自由なことがたくさん在ることに気付き、これを解決するために立ち上げた日本初のがん患者生活サービス事業「VOL-NEXT」の事業内容についての説明があった。治療を受けられている患者さんには大変有意義で、かつ勇気付けられる話だったと思う。

（3）受けていますか？乳がん検診　ー市町村の乳がん検診をもっと活用しようー

茨城県保健福祉部保健予防課　楊箸幸恵さんより、茨城県の乳がん検診の現況について、現在の乳がん検診指針についての説明とマンモグラフィ検診、超音波検診の市町村ごとの導入状況や成績について説明があり、まだまだ受診率が低いことが説明された。

（4）見つけちゃったらどうしよう、でもやらなきゃ　ー実践！乳房自己検診方ー

つくば総合健診センターの検診現場で活躍されている光畑桂子さんより、乳がんは自分で見つけられるがんであり、いかに自己検診が大切かとのお話があった。会場の全員でストレッチ体操のあと自己検診の実技指導がありリラックスした中での講演であった。

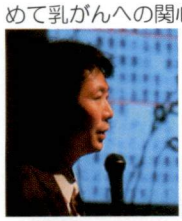
前半は聴衆が多かったが、後半は平行して行なわれた「患者のための講演会」の方に流れた人も多く、ほぼ関係者のみのような印象をうけた。したがって、ディスカッションは内容に窮したところがあった。また、行政や県会議員の方もおられたので、市町村が行なう乳がん検診を有効にするには最低でも３０％以上の受診率が必要で、現在の予算措置ではこの達成は無理なことを明確にする必要があるように感じた。（講演「乳がんをかんがえよう」司会担当）

放射線技師セミナー　　小仁所　圭子　　石岡市医師会病院

この度、『放射線技師に必要なマンモグラフィの知識』と題し、船橋市立医療センターの石井　悟放射線技師にご講演いただきました。石井技師は、乳房撮影ガイドライン普及班の班員であり、日本乳癌健診学会の評議員としてもご活躍なさっておられる方です。また、乳房撮影ガイドライン精度管理マニュアルの共同ご執筆なども手がけておられます。

今年４月より、マンモグラフィ認定の更新制が導入されましたことを含め、実践向きに現場に役立つ、撮影技術のポイントをわかりやすくお話してくださいました。

「放射線技師セミナー」というタイトルにも関わらず、一般の方も含め、予想をはるかに超える方々に参加して頂き、改めて乳がんへの関心と石井技師の平素からのご尽力とを伺いえます。私は、はじめての参加でしたので技師会ブースやボランティア募集の段取りだけでも手探り状態でした。しかし、皆様方の温かいご協力とご支援のお陰で、実行委員として微力ではございましたが、何とかこの日をむかえることができ、司会をも担当させていただきました事に感謝しております。



今後とも、乳がんによる死亡の減少に、少しでもお力になれるよう努めてまいりたいと思います。（実行委員・放射線技師セミナー担当）

患者のための講演会　　池澤　大和　　ノバルティス　ファーマ（株）

フェスティバルを通して得たもの　ー患者さまの声を聞いてー

2007 年度つくばピンクリボンフェスティバル、ご成功誠におめでとうございます。

今年もこの様な素晴らしいフェスティバルに参加出来た事を大変誇りに思っております。この度、弊社では植野先生・森島先生よりお話をいただき、渡辺　亨先生（浜松オンコロジーセンター　センター長）による「患者のための講演会ー腫瘍内科医による乳癌治療ー」を主催させていただきました。

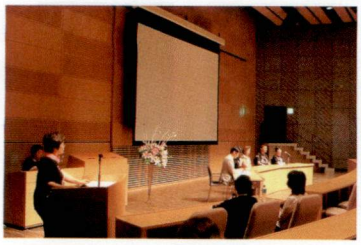
当日は講演開始前にアンケート用紙をお配りし、渡辺先生に是非お伺いしたい事を自由に記載いただき、講演の最後に坂東先生より御紹介いただく形式を取りました。私も会場責任者としてアンケートを回収し坂東先生に大まかな項目ごとに振り分けてお渡しするにあたり、全ての記載内容を拝見しましたが、そのアンケートに書かれていた内容を目にして思うところが多々ありました。患者さまご本人が記載されたご自身の治療に対する不安や悩み、また患者さまを支えるご家族やご友人としての悩みなど、御出席の方々それぞれの気持ちが各々文章から直に伝わってきたからです。我々製薬メーカーは日頃、医療関係者の方々に接する事が多く、実際薬剤を服用される患者さまと接する機会はまずありません。今回の講演会開催を通し、製薬メーカーとして乳癌診療に関する正確かつ最新の情報について患者さまを含めた一般の方々にも広く伝達する必要性と義務を改めて強く感じました。

今後もこのフェスティバルを通し「早期発見の重要性」を啓蒙すると共に「治療に関する正しい知識」も多くの方々に知っていただける機会となる様、微力ながらサポートさせていただければ幸いです。

来年もまた、素晴らしい会となりますように。

ディスカッション　家族としての関わり方

正保　春彦　茨城大学教育学部



エポカル中ホール 200 において患者や患者の家族の方々にパネリストとしてご参加いただいて「家族としての関わり方」についてのディスカッションを行いました。参加してくださったのは患者さんご本人の他、患者の「夫」、「子」、「姉」のそれぞれの立場にある方々です。以下は家族の方々からのお話の要点です。

夫：「あえて特別扱いせず、何でもやらせることでリハビリに繋げていく」、子：「母の病気によりきょうだいが親戚に預けられバラバラになった」、姉：「自分が妹に代わりたかった、守りたかった」、本人：「親に病気のことを言えなかった」。

これらのパネリストの方々のお話を受けてフロアからもご意見をいただきましたが、「2 度ガンにかかって悔しい」、「家族に迷惑をかけてしまい申し訳ない」というお話がありました。

多くの方々からのお話を通して、病気をめぐって患者さんと家族の双方がそれぞれ相手を思いやりながら生きておられるということを実感し、そのようなお気持ちに対するサポートの態勢を作っていくことの必要性を感じました。（臨床心理士・「家族としての関わり方」パネリスト）

患者の会コーナー・家族としての関わり方

伊東　孝子　たんぽぽ会

今年も、フェスティバルに参加することができました。患者会のコーナーは、くるみの会・森の会・たんぽぽ会・あけぼの会の参加がありました。企業の方々の展示ブースと同室だったこともあり、入室しやすく、昨年よりもたくさんの方々とお話しをすることができました。まだまだ患者会の存在を知らずに１人で・・・また、家族だけで・・・悩んでいる方が、多いことに気づかされました。患者会の存在を、もっと知らせていくと同時に、参加しやすい環境をつくっていきたいと思います。また、昨年より患者会同士の交流がもてるようになり、互いの勉強会や、お話会に参加して意見交換をしたり、患者会主催で講演会も開催できるようになりました。自分の病気のことを話せたり、聞けたりする相手ができるということは、とても心強いことです。

家族としての関わり方のディスカッションでは時間が遅かったこともあり、参加人数が少なくアンケートだけ書いてくれて、

帰られた方々もいらっしゃいました。患者の姉として・子供として・夫として・本人として・お話しをして下さった皆様と、ディスカッションに参加していただいた皆様が、正保春彦先生を中心にとても話しやすく、和やかな雰囲気でした。

参加・御協力いただいた皆様ありがとうございました。また、来年も、お会いしましょう。（実行委員）

ピンクリボン絵画展　　小田　陽子

母の日の開催にちなんで、おかあさん方にピンクリボン運動を知ってもらい、乳がんへの関心を高めてもらうため、児童絵画展を企画いたしました。子供たちの絵を会場に展示して、まさに検診を薦めたい年齢の方々に来場していただこうという思惑でした。絵を募集するにあたり、一般募集と並行して、近隣の吾妻小学校・土浦からは真鍋小学校に協力をお願いいたしました。両校とも快く引き受けてくださった上に、３年生を対象として、図工の授業で取り組んで下さり、なんと合計で300枚近い絵が集まりました。前日より一枚一枚に名札を付け、並べて行ったのですが、それは楽しい作業でした。そして終えた時全体を見てその壮観さにビックリしました。エポカルのロビーがパッと明るくなりお花畑のようでした。

３年生の皆さんありがとうございました。皆さんの絵には人を引き付ける力があります。お陰様で、参加者、主催側双方から好評を博しました。閉会式では、人気投票の結果トップ５人と、特別賞６人の作品をスクリーン上に投影しました。特別賞はゲストや実行委員に選者になってもらい決定したのですが、皆さんあれもこれもと迷われていました。後日、各受賞者には、賞状を、全員には、ピンクのバンダナをお届けしました。

残念だったことは、掲示が10時から４時までと短かった事。絵をゆっくりご覧になる時間が取れなかった方もいたかと思います。そして、賞状を直接手渡しできなかった事です。私自身も、この絵を描いた子に会ってみたいと思う作品が何枚もありました。一般募集は殆ど集まらず、絵の募集のかけかたも難しい点でした。

総体的には子供の力と数の力に後押しされ、予想以上の成果が得られたかと思います。

前日、当日お手伝い下さったボランティアの皆さん、細やかで丁寧に作業を進めて下さり、ありがとうございました。そして両校の担任の先生方、校長先生、教頭先生、適切なアドバイスを下さり、ご多忙を押してご協力下さりありがとうございました。私にはこの企画を通して子供（以前子供だった人も）からの、おかあさんへの暖かい思いが感じられました。

当日会場では、家族で来場された方々もちらほら、また自分の絵の前で、お母さんに、なんでこの絵を描いたのか説明をしている子も見られました。最後に当初の思惑ですが、吾妻小地区と真鍋小地区ではこのマーク　が何のシンボルかわかる人が増えたに違いないと確信しております。（実行委員・絵画展担当）

実行委員より　　山浦　俊一　　茨城県保健福祉部保健予防課

今回、初めてつくばピンクフェスティバルに参加させていただきました。

この４月より、がん対策、特に女性のがんに対する業務に携わることとなりましたが、乳がん検診受診率の向上については、県においても課題となっています。

この課題に、市民団体が熱心に取り組んでいるとのことで、どのようなフェスティバルになるのか、興味を持って参加させていただきました。

当日は、県でも啓発ブースを出展していた関係上、残念ながら全ての行事に関わることはできませんでした。しかしながら、事務局やボランティアによる進行の手際の良さはとてもすばらしいもので

したし、バルーンパフォーマンスや、各団体の啓発ブースにおけるスタッフの皆様のパワフルな活動ぶりに、ただ驚くばかりで、時折自分のブースを離れては、各団体のブースを訪問したり、スタッフと直接お話させていただきながら、私自身も大いに啓発させていただきました。

本県の乳がん検診受診率の向上に対する取り組みとして、このような活動が市民レベルで行われていることに頼もしさを感じるとともに、この課題に、県としても、皆様と連携して、一層普及啓発に取り組んでいかなければならないと実感した次第です。　企画運営にあたられたスタッフやボランティアの皆様、大変お疲れ様でした。

実行委員より　神田　裕子

自分が乳がんに罹患したことには何か意味があるのかもしれない、、、いやこの経験は何かに生かさなくっちゃ！！と思い、今回のフェスティバルは早い段階から実行委員として参加いたしました。とはいえ前２回のフェスティバルには参加していませんので、具体的なイメージが描けないままでしたが、なんと受付の責任者という大役を仰せつかり焦りました。しかし、事務局からの完璧に計算されたマニュアルと事前の綿密な打ち合わせと手際のよいボランティアのみなさんのおかげで、ほとんど、スムーズに進行しほっとしております。改善点も多々ありますが、次回に繋げたいと思っております。

全体的にはバルーン効果もあり和やかな雰囲気をかもし出していたように思います。個人的には、多数の人々の善意と手弁当の協力で成り立っているこのフェスティバルの、その一人一人の思いを肌で感じることができ、そういった善意の中にいる事が心地好くて幸せな一日でした。

「ピンクリボン」という名前は浸透してきたでしょうか。誰もが耳にしたことがあって女性の誰もが「乳がん検診はもちろん毎年いってるよ」と話せるように受診率アップに向けて、来年も微力ながら参加したいと思います。

実行委員より　大塚　正裕

夜勤明けのイベント当日。体力に不安を感じながら少し遅れての会場到着でしたが、前日から皆さんの準備の手際の良さで、もう会場はハートの風船と笑顔でいっぱいでした。

広い会場、もりだくさんの絵画展、講演等の企画でしたが。皆さんの力で予想以上のとても素敵なイベントになりました。今までの皆様の地道な活動実績で、ピンクリボン活動も近年、さまざまな形で注目をされています。イベントを通してもこれからの可能性が無限にあることを感じました。

今後も、さまざまな情報提供やイベント活動を通してハートのネットワークが広がり、”健康で豊かな生活”を作る礎になるような活動になっていきたいとハートの風船に誓うのでした。

ボランティアより　永田　京子

今回「乳がんをかんがえよう」をテーマとして、風薫る５月１３日「つくばピンクリボンフェスティバル０７」が開催され、今年もボランティアとして参加させて頂きました。毎回色々な企画が催されています。今回は、診療放射線技師を対象に船橋医療センターの石井悟氏による放射線技師セミナー『放射線技師に必要なマンモグ

ラフィの知識』の講演が開催されました。乳癌検診にマンモグラフィが導入された経緯やこれから新しく乳がん検診に携わる技師に必要な知識等の講演がありました。マンモグラフィ撮影認定放射線技師になるための講習会の具体的な内容、今年から撮影認定放射線技師が５年経過すると更新を行わなくてはなりません。その更新内容の概略の説明もありました。これから新しく乳がん検診や撮影を行う技師、更新対象の技師にとってはもちろんの事ながら乳がん検診を考えるうえでもとても有意義な講演だったと思います。「早期乳がんを発見するためにマンモグラフィ検診をうけましょう」と広告をだしているところもあります。現在はまだマンモグラフィ検診が中心になっています。乳房の撮影方法は勿論の事ながら機械やシステム・マンモグラフィの読影等一箇所でも不十分なものがあると正しく診断出来なくなります。その事を知るのにもとても役にたったのではないかと思いました。一般の参加者でマンモグラフィにとても興味深くわざわざ放射線のブースをめざして行かれる方もいらっしゃいました。

日本人女性の３０人に１人以上が乳がんになると言われている現在、乳がんの関心も、検診率もまだ低く、年々死亡数は増えています。ピンクリボンの願いはひとつ「乳がんで悲しむ人をなくす」ことです。今回のフェスティバルを機会として、また新たな気持ちで乳がん検診に携わっていきたいと思います。

ボランティアより　　村田　美紀子

５月１３日は天候にも恵まれ、多数の方が参加してくださいました。また、今年は母の日の開催ということで、女性のためのイベントとしてはぴったりの日に開催されたと思います。

私は今年、検診部門のボランティアに参加させていただきました。
検診受診の方々のお話を聞くと、やはり関心の高さと、また、知識の豊富さに驚かされました。しかし、間違った方向で認識されている場合もありました。こうした参加者の生の声を聞くことで、乳がん検診の啓発活動をもっとがんばろうという励みにもなりました。

このようなイベントを継続していくことで、乳がんについて知る人がだんだん増え、より多くの方が乳がん検診を受けてくださるようになることを願います。

ボランティアより　　野口　恵

わたくしは、今回初めて、つくばピンクリボンフェスティバルに参加しました。
少しでもお役に立てることができたらと思い、ボランティアとしてバルーンパフォーマンスのお手伝いをさせていただきました。

当日は、朝早くにもかかわらず、たくさんのボランティアの方がいらっしゃいました。
なかには、病院の先生方もいらっしゃいました。
乳腺科の先生は、大変おいそがしいと聞いておりますが、いつもの診察室の中での真剣な表情とは違った、なごやかなご様子を拝見し、 このように優しく、熱心な先生が身近にいらっしゃることを、大変心強く思いました。
バルーンが完成した後は、患者会の皆様と談笑したり、講演を聴いたりと、とても楽しい一日を過ごす事ができました。
わたくしは、昨年の12月に手術をうけました。

退院して間もない大晦日の夜、紅白歌合戦に学生時代の同級生が出場するということで、テレビを見ていました。
その同級生が歌った「千の風」を聞きながら、もし治療を始めるのが遅れていたら、自分もこの歌のように風になっていたのだと、しみじみと考えていました。
フェスティバルの当日、朝の風を体に感じながら、一つ一つの風船に願いを込めました。
たくさんの命が助かりますように。
乳がんになった人も、乳がんになっていない人も、患者さんの家族も、病院の先生も看護師さんも、その他すべての人が、この風船のように幸せなピンク色のハートを、いつでも、いつまでも持ち続ける事ができますように。

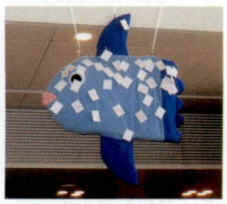
つくばピンクリボンフェスティバル07に参加して　東島　信明　すぎなみ大人塾&知の市庭

私どもは、平成17年度に、杉並区社会教育センターで開催した「すぎなみ大人塾」の卒業生グループと杉並区内で活動をしているNPOです。すぎなみ大人塾では、地域の課題を捉え、その課題を解くために市民の手で社会的な起業をしたいと考えてきました。

その中で、家庭にいる子育て中の母親の健康について考えていく企画が生まれ、乳がんをいかにして、早期に発見し、早期治療へと結びつけていくか、社会にとって大きな課題で、身近な問題として、考えるきっかけ作りをしていきたいと考えました。

＜主な活動歴＞

2006年8月 杉並区阿佐ヶ谷七夕祭りに、マンモグラフィ検診啓発のために、「マンモ　マンボウ君」を製作、展示
2006年10月　Pink　Ribbon　in　TOKYO　2006に「マンボウ君」とともに参加
2006年11月　「私が口紅をつけるわけ」ジェラリン・ルーカス著　出版発売
2006年11月24日　NPOのつどい・ワークショップ開催
2007年3月11日　子育てメッセで座談会「聞いてみよう!胸のことあれこれ」開催
2007年3月24日　活字文化フェスタで「乳がん早期発見啓発活動から」活動をパネル展示
2007年5月11日　日本赤十字武蔵野短期大学　乳がん座談会協働参加



このような経過を経て
2007年5月13日　つくばピンクリボンの会のイベント（展示ブース）に第二代目「マンボウ君」と参加しました。

＜メッセージ＞

つくば市周辺の皆様と共に女性の健康について考える活動に参加できて幸いでした。

＜お願い＞

私たちで出版した「私が口紅をつけた理由」の著者であるジェラリン・ルーカスさんがつくば市に10月28日参りますので是非彼女の活動を聞いてください。

展示ブース初出展　能美　祐子　東京YWCA

“ピンクリボン活動”の第一の目標である乳がん早期発見の啓発とともに、すでに乳がんにかかって手術を受けた後の女性たちもさまざまな形でサポートを必要としていることを多くの方々に理解してほしいという願いから、今回私たちの活動の紹介を兼ねて、ブースを出展をさせていただきました。

私たち東京YWCAが取り組んでいる活動「アンコア」（encore）は乳がんの手術後の女性たちが心も身体も元気を取り戻し、いきいきと過ごせるように、情報共有とプール・スタジオでの運動を組み合わせた8週間のプログラムです。手術後も抗がん剤や放射線治療など長年にわたりケアが必要となることから、不安や悩みは尽きることなく、周囲の支えがあってもやは

り病気とは自分ひとりで向き合うことになります。同じ病気を経験した仲間と情報とともに気持ちを分かち合うことで心の負担は軽くなり、力強く生きる励みになることもあります。また手術後の身体の不調や体力の衰えを回復するための適度な運動は非常に効果的です。2005年4月から始めたこのプログラムにすでに100名以上の方が参加され、ほとんどの方が仲間づくりと健康回復に役立ったと喜んでくださっています。

この日は５０名を越す方がブースを尋ねて下さり、プログラムの説明をさせていただきました。場所やスケジュールの都合で私どものプログラムには参加が無理な方も、近所で運動してみようかしらと関心を持たれた方も多く大変嬉しく思いました。

昨今、乳がん患者向けの講習会やイベント、そして患者会の組織も増えつつあり女性たちにとってはとても心強いものだと思います。このつくばピンクリボンフェスティバルにおいても大変お力のある先生方が熱心に患者やその家族、そして乳がん早期発見のためにと、貴重な講演を行ってくださり、またさまざまな分野から情報が提供され実に充実した内容でありました。イベントに参加された方々にとって有意義な一日であったことと実感しております。

つくばピンクリボンフェスティバル07に参加して

小倉　美也子　　株式会社カスミ

スーパーマーケットをご利用になるお客様の大半が女性であること、また、当社従業員の約８割を女性が占めていることからも、乳がん撲滅を目指すピンクリボン運動は、とても身近な運動といえます。当社は、今回のフェスティバルをきっかけに参加いたしました。

フェスティバルに参加して、今まで直面しなかった乳がんの現状について再認識するとともに、より多くの方へ運動を広めたいと思いました。

私たちができる活動へのご協力として、ひとつは、お客様へ乳がん検診の大切さについて広報誌等でＰＲしていくとともに、従業員やその家族の検診率を上げることを目指し、継続して取り組んでいきたいと考えております。

参加者数

総数	802名〔内　高校生以下95名〕	
イベント別	乳がん検診	77名
	ウォーク	200名
	乳がん相談	13名
	講演	261名

主催・共催・後援・協賛

主催：NPO法人つくばピンクリボンの会　Tsukuba Pink Ribbon Coalition

共催：茨城県、つくば市、茨城県医師会、つくば市医師会、筑波大学附属病院、茨城乳腺疾患研究会、(財)筑波メディカルセンター、(社)茨城県放射線技師会、（財）茨城県メディカルセンター、(財)茨城県総合健診協会、東京医科大学霞ヶ浦病院、取手市医師会取手北相馬保健医療センター医師会病院、日立メディカルセンター、土浦協同病院、NPO法人乳房健康研究会、J-COM茨城

後援：茨城県看護協会、NHK水戸放送局、首都圏新都市鉄道株式会社（TX）、茨城県ウオーキング協会

協賛：アストラゼネカ株式会社、アロカ株式会社、株式会社ウロメディカルジャパン、エイボン・プロダクツ株式会社、QOL 総合研究所（Q 研）、協和発酵工業株式会社、コニカミノルタエムジー株式会社、サノフィ・アベンティス株式会社、塩野義製薬株式会社、ジェクス株式会社、シーメンス旭メディテック株式会社、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社、株式会社スヴェンソン、武田薬品工業株式会社、中外製薬株式会社、GE 横河メディカルシステム株式会社、大鵬薬品工業株式会社、東芝メディカルシステムズ株式会社、日本化薬株式会社、ノバルティスファーマ株式会社、株式会社日立メディコ、ファイザー株式会社、富士フィルムメディカル株式会社、ブリストル・マイヤーズ株式会社、ユコー株式会社、株式会社ワコール

筑波記念病院トータルヘルスプラザ、医療法人おおたしろクリニック、あおやぎ医院、医療法人弘仁会志村病院、医療法人ここの実会嶋崎病院、KG 竹園クリニック、岩佐医院、二の宮越智クリニック

株式会社カスミ、広沢グループ、つくば学園ロータリークラブ、日本生命保険相互会社、皆葉自動車、株式会社横山印刷

ピンクリボンクラブひたち、くるみの会、森の会、たんぽぽ会、NPO 法人 J-POSH、東京 YWCA アンコア、NPO 法人知の市庭＆すぎなみ大人塾

実行委員

阿部聡子（鉄蕉会亀田総合病院）伊東孝子（土浦協同病院たんぽぽ会）植野　映（筑波大学臨床医学系乳腺甲状腺内分泌外科）上野　修（上野歯科医院）上野千映（筑波大学附属病院）太田代紀子（おおたしろクリニック）　大塚正裕　岡田周子（主婦）岡田益吉（（財）国際高等研究所）　小田陽子（筑波大学臨床医学系乳腺甲状腺内分泌外科）小野幸雄（つくば総合健診センター）貝塚広史（貝塚みずき野クリニック）春日晴夫（（財）茨城県メディカルセンター）加藤勝義（(財)茨城県総合健診協会）川口広子（筑波大学附属病院）神田裕子　菊島珠江（くるみの会）鯨岡 結賀（筑波記念病院放射線科）楠木成子（筑波大学附属病院）河野いづみ　小関暎子（筑波記念病院トータルヘルスプラザ）小林　昇（(財)茨城県メディカルセンター）坂井朋夫（東京医大霞ケ浦病院 放射線部 ）菅谷嘉恵子（筑波大学附属病院）助川みや子（筑波大学附属病院）鈴木武樹（取手北相馬保健医療センター医師会病院 ）田中佐代子（筑波大学芸術学系）坪井光子 （アルスホール　ミュージアムショップ）東野英利子（筑波大学臨床医学系放射線科）飛田紗智恵　中野潤子（くるみの会）坂東裕子（筑波大学臨床医学系乳腺甲状腺内分泌外科）東島信明（知の市庭）藤原 登子　光畑桂子（筑波メディカルセンター病院、つくば総合健診センター）文　由美（つくばセントラル病院外来）茂木瑞子（あけぼの会）森島　勇（筑波メディカルセンター病院乳腺科）八木淳子　楊箸幸恵（茨城県保健福祉部保健予防課）山浦俊一（茨城県保健福祉部保健予防課）山田 陽子（森の会　筑波メディカルピンクリボンの会）横田すい子（筑波大学附属病院）

つくばピンクリボンフェスティバル０８は、

２００８年５月１１日（日曜日　母の日）

に開催予定です。

皆様のご参加お待ちしております

NPO法人つくばピンクリボンの会
Tsukuba Pink Ribbon Coalition

Tel&Fax: 029-856-2002 E-mail: tsukuba-pinkribbon@nifty.com
http://homepage2.nifty.com/tsukuba-pinkribbon/
筑波学園郵便局私書箱20号 つくばピンクリボンの会 〒305-8691
つくば市天久保1-2 つくば総合健診センター内 〒305-0005